歴史を語る建物たち 庄内編（第12回）

今日、20世紀型の開発優先社会は終焉を迎え、文化、景観、観光などの側面から歴史的建造物が見直されるようになってきた。平成８年の登録有形文化財制度の発足などは、その象徴である。しかし、一方で、文化財指定を受けていないがその価値は十分にある古い建物が、道路の拡幅などで無造作に壊されていく現状もある。本シリーズでは、文化財指定を受けた有名建造物から、街中にひっそりとたたずむ建物まで幅広くスポットを当て、それらの歴史的経緯やエピソードなどを紹介する。

旧青山本邸（遊佐町）

遊佐町内の国道７号線を走行していると、高さ数メートルはあろうか、「旧青山本邸」と書かれた鉄柱のような看板が目に入る。とても目立つので、看板を見てフラッと訪れる観光客も少なくないようだ。同町出身で、明治期に北海道のニシン漁で巨万の富を築いた青山留吉（1836－1916）の邸宅で、「庄内地方の民家の特徴的な建築様式をよく残している」との評価を受けて、平成12年に国の重要文化財に指定された（登録名称は旧青山家住宅）。

「北海道の漁業王」が故郷へ錦を飾る

青山留吉は天保７（1836）年、現在の遊佐町青塚に生まれた。家は貧しく、漁師の父親が獲った魚を母親が酒田で売って生計を立てていた。留吉も幼い頃より母親の行商を手伝う一方、隣家の寺で読み書きを勉強した。一度は秋田へ養子に出されるも、家風が合わずに実家へ戻り、24歳で蝦夷（現在の北海道）へ渡った。その後、祝津（現在の小樽市祝津）を拠点にニシン漁で成功を収め、青山家は白鳥家、茨木家と共に「祝津三漁家」と呼ばれるようになった（高橋石雄編『青山家小史』）。

大正初期の旧青山本邸。「故郷へ錦を飾る」にふさわしい大邸宅だったことだろう（館内展示の額入り写真を筆者撮影）。

当時のニシン漁は、豊漁なら莫大な利益が得られる一方、漁場の開設には巨額の設備投資が必要だったため、資金繰りに失敗して没落する者も少なくなかった。では、なぜ留吉は成功したのか。

旧青山本邸でボランティアガイドを務める阿部栄市さんは、「母親の行商を手伝って身に付けた商才、貧しいながらも寺で学ぶほどの向学心と勤勉さ、そして、漁場を統率するリーダーシップを兼ね備えていたからではないでしょうか」と話す。その意味で留吉は、漁師であると同時に実業家としての一面もあったといえよう。

隆盛を極めた留吉は、生地の青塚に広大な土地を購入し、明治23年、３年がかりで大邸宅（現在の旧青山本邸）を建て、一族（遊佐青山家）を住まわせた。明治41年には祝津の漁場を子孫（祝津青山家）に譲って自らも青塚に隠居し、大正５年に81歳でこの世を去った。

別邸よりも地味な本邸

旧青山本邸は、建築様式は一般の民家と変わらないが、その圧倒的な広さに加え、当時は非常に珍しかった瓦ぶきの屋根や、鳥海山から運んだ約４ｍの庭石（道中、自前で３カ所の橋を補強したという！）、高価な木材で作った座卓や箪笥（たんす）などの家具などが特徴的である。しかし、全体的にはいささか地味な印象を否めない。一方、大正時代に子孫が祝津に建てた邸宅（現在の旧青山別邸。国の登録有形文化財）は、新宿の有名デパートの建築費が50万円だった時代に31万円を費やした豪華絢爛（けんらん）な建物である。

この違いについて、受付の方に尋ねたところ、「留吉は、苦労の末に財を成した人なので、家（旧青山本邸）の造りも質実剛健だが、子孫はもともと裕福だったので、豪華絢爛な邸宅を造ったのでは」という返答だった。

実際、祝津の旧青山別邸を訪れた観光客には、「これが別邸なら、本邸はどんなにすごいのだろう？」という思いで、旧青山本邸を訪れる人もいるという。そして、意外と地味な造りに、逆に驚きながらも、本邸の方がいいとおっしゃるお客さんもいるそうだ。好みはあろうが、ぜひ見比べてはいかがだろうか。

長い間空き家状態だったのが幸いした？

平成４年、東京で療養生活を送っていた遊佐青山家４代目の嘉津也が亡くなると、親族の意思により、ほどなくして、土地、建物（本邸、土蔵、井戸小屋など）、所蔵品はすべて遊佐町に寄贈された。

しかし、本邸はずいぶん前から空き家だったようだ。前出著書『青山家小史』の昭和26年の欄には、「遊佐青山家は管理人を置き、家族は酒田で暮らしたようである」との記載がある。それゆえ、寄贈された際は、畳などが相当傷んでいたらしい。

もっとも、住人がいない状態で、長い間時が止まっていたおかげで、本邸には往年の生活空間はほぼ残されていた。改修を経て、平成８年に一般公開されたが、“復元”されたところはほとんどなかったという。もし誰かがずっと住み続けていたら、住みやすくするためにリフォームされて復元に時間がかかり、公開が遅れていたかもしれない。

平成25年に公開された映画『おしん』では、旧青山本邸が、おしんの最初の奉公先である中川材木店のロケ地となった。また、建物周辺で番組収録やロケを行っていた有名人などが立ち寄ることもある。時には団体大型バスの来訪が重なって、受付で調整に奔走することもあるそうだ。もしかしたら、復元ではない“そのまま”の光景を見られることが、旧青山本邸の魅力なのかもしれない。

誇れる地域資源として

旧青山本邸は、子どもたちの教育の場としても活用されている。地元（藤崎小学校）の小学生が、建物や青山留吉のことを勉強し、その成果を「ガイド」として保護者や地域の人々に披露している。なお、旧青山本邸のすぐ近くにある西遊佐小学校が平成26年３月に閉校するまでは、同小の児童有志で構成されるボランティアガイドが、毎月一回、実際に観光客のガイドを行っていた。受付には、今も時折、「次の子どものガイドさんはいつですか？」と問い合わせがあるそうだ。

“本職”のボランティアガイド（現在は５人）も、ただガイドするだけではない。ガイドした観光客から聞いた意見を町にフィードバックし、町の担当者とボランティアガイドが共に知恵を出し合い、より観光客に喜ばれるガイド方法や、魅力的な企画展示を模索している。こうした一種のPDCA（Plan〔計画〕→Do〔実行〕→Check〔評価〕→Act〔改善〕）サイクルを機能させることで、旧青山本邸の地域資源としての価値や誇りをブラッシュアップしていると言っていいだろう。

「お客さんとのコミュニケーションを通して地域に貢献することは楽しい。元気なうちはボランティアガイドを続けたい」と話す阿部さん。次にお会いする時は、どんな話をしてもらえるか楽しみだ。

（東北公益文科大学特任講師・山口泰史）

玄関の板を外すと、中に、当時の履物が収納されていた。帳場と同じく梨の木が使われている。梨は「何も無し」と、盗難に遭わない縁起のいい建材とされる（筆者撮影）。